

人里には集会所が二軒ある。片方は、週に一度のとある催しのためだけに用意された。中は受付・脱衣所・ホールの三部屋に分かれている。その脱衣所に、慧音はいた。既に脱いでおり、生まれたままの姿を晒している。脱衣籠に几帳面に畳み入れた己の衣装を、何をするでもなくじつと見つめていた。

催しは始まったばかりだが、みな既にホールに移動しており、室内には誰もいなかった。衣装ロッカーは大半が使用中で、今回の催しも盛況であると物語っている。ホールからは壁越しに陽気なBGMが聞こえてくる。何が行われているか、嫌でも想像させられる。

本当に参加すべきなのか、彼女は今なお悩んでいた。仮にも教師が出て良い会ではない。今からでも帰るべきではないかと、理性が訴える。一方で、それでは怖じ気づいて逃げたみたいでみっともないぞと、妙に見栄っ張りなところが主張している。

「……い、いくぞ、いくつたら行くぞ……」

結局、うじうじと悩むこと五分、ようやく決心した。己を奮い立たせるように、強めにロッカーの扉を開める。えいやと、鍵を引き抜く。受付で配られた緑のリストバンド——参加証——と一緒に、左手首に巻いた。

ホールに繋がる重たい鉄扉の前に立つ。何一つ纏わぬ、素っ裸のまままで。着忘れたわけではない。生まれたままの姿こそ、この催事における正装なのだ。正気を疑うことに。

決意と共に、扉を押した。油を差された蝶番は滑らかに動き、感触は見た目より軽い。戸枠と戸板に隙間が出来た途端、鼓膜に圧を感じる音が流れ込んできた。

「うわっ」

反射的に、小さくのけぞる。長居したら、耳を悪くしてしまいそうだ。だがそんなのは、すぐにどうでもよくなった。中で繰り広げられている光景を、目の当たりにしたがために、絨毯張りの会場内を、ショッキングピンクのライトが薄暗く照らしている。河童謹製のオーディオシステムによるBGMが、心臓に響く重低音を奏でている。

ベッドやソファ、テーブルが、場内のいたるところに無秩序に配置されている。複数の男女が、組んずほぐれつ肌を重ね合わせていた。妖しげな照明の下、誰も彼も裸をさらし、様々な粘膜を擦り合わせては熱い声を上げている。

はつきり言って異様だ。まるで黒魔術の儀式だが、れっきとした人里公式の催事だった。名を、乱交会といった。

人里における楽しみといったら、酒と噂話くらいのものだ。遊びの少なさはストレスを呼び、ストレスは軋轢を生む。ガス抜きのために妖怪の賢者や稗田が編み出した一計こそ、乱交会だった。こういう催しかは、名前から明らかだ。

目論見が奏功したかは、賑わいっぷりを見れば明らかだろう。導入から一年ほど経つが、

住人達もすっかり受け入れ、一晚の自由恋愛を楽しんでいた。

そんな乱交会を、慧音は当初、嫌悪していた。当然だ。彼女はいわゆる常識人であり、真つ当な貞操観念を持ち合わせている。一時の楽しみのためだけに異性と交わるだとか、フリーセックスだとか、そういう一切合切を言語道断だと考えていた。

態度を変えたのは、流れる血のせいだった。半分獣であるために、彼女は性欲が強い。だからといって恋人もいないし、行きずりの男と寝るなんてもつての外のことだ。結局、不本意ながら、毎晩「処理」を余儀なくされていた。

そうして人が一生懸命堪えているというのに、会に足繁く通って、爛れきった性生活を楽しんでいる輩がいる。結局、我慢も限界を迎え、欲望に負けて乱交会に足を運んだのだ。正直、今からでも大人しく帰るべきではないかと思っているが。

「さて……」

と、やんごとなき事情を抱えてやって来たまでにはいいものの、ホールの隅で立ち尽くすほかになかった。勢い勇んで足を踏み入れたけれども、初参加である慧音には会の勝手が分からない。仕方ないので、あちこちで繰り広げられる男女の閨事をじつと眺めていた。

あちらでは、男と女が抱き合い、肌を重ねながら接吻している。唇の音が聞こえてくるほど熱烈なバーゼだ。

あちらでは、腰掛ける男の股に女が顔を埋め、肉茎をしゃぶっている。頬に己の唾液が付着しているが、気にしているふうもない。

あちらでは、男が女を組み伏せ貫き、執拗に腰を振りたくっている。大口を広げた秘裂が、音をたてながら男根を咥え込んでいる。

あちらでは、互い違いに寝転んだ男女が、お互いの股を舐め回している。そんな行為があるのか!? と、愕然とさせられた。

「まったく、どうもこいつも、獣のようだ……はあ」

呆れたように呟いたが、体には確実な変化が生じ始めていた。強い酒を口にしたときのように、頬がかあつと熱をもつ。室温が数度、上がったように感じられる。暖房が効いているのではない。肉体自体が、火照りつつあるのだ。

特に、腹の奥が燃えているようだった。とつ、とつと、BGMとは別に、耳の奥で断続的なリズムが響いている。心臓が高鳴っているのだ。深呼吸をして新鮮な空気を取り込み、冷やそうとする。むろん、無駄だった。

そもそも乱交会に参加したのは、獣欲を堪えかねたからだ。性愛に飢えている状態で、快楽の埒場たる空間を訪ねたわけだ。梅干しを見て唾が浮かぶように、他人の性交を前に官能への期待を覚えるのは、ごく当然のことといえた。

そうしてしばらく、目の前で繰り広げられている光景に見入っていた。が、不意に我に返ることとなる。

「おや、先生じゃないですか」

「はッ!？」

その瞬間の反応ときたら、さながら猫と出くわした鼠のようだった。すっかり没頭していたところに、いきなり声をかけられたのだ。驚くのも無理はなかった。

声をかけたのは、里の目抜き通り入口の八百屋の旦那だ。禿頭の目立つ六十代手前で、さほど丈のない慧音よりさらに背が低い。にこにここと、いつも軒先で見せている人のよい笑みを浮かべている。素っ裸で、加齢により垂れた体を晒していることを除けば、普段となんら代わりはしなかった。

「あ、ああ、八百屋の旦那さん。その、どうも」

何がどうもだ、と心中で自らを罵倒する。が、こんな荒唐無稽なシチュエーションでの模範的な挨拶など、知るよしもなかった。

「いや、ここで先生とお会いできるとは、嬉しいですなあ」

男は相変わず、邪気のない大黒様じみた笑顔を見せている。が、股間のモノはいきり立ち、天を衝いている。視線は、露骨なまでにこちらの体を這っていた。

平時にそんな風に見れば、間違ひなく糾弾されるだろう。が、乱交会では極めて自然なことだった。また、慧音の肉体自体、彼にそうにさせるだけのものはあった。

もともと彼女は、人里でも美人教師として名が知れるくらいの美貌の持ち主だ。優しげながら芯を感じさせる顔立ち、生徒・保護者を問わず人気が高い。ふんわりと滑らかな髪など、女性陣から嫉妬と羨望の対象になっていたりもする。

対する体つきは極めて豊かで、秀麗なる顔立ちに負けず劣らず素晴らしいものだった。仕事着のワンピースがゆったりしているため隠れがちだが、出るところの出たゴージャスボディだ。メリハリのきいた輪郭は、老若男女まとめて魅了するものだった。いわゆる、着痩せするタイプというやつだ。

肌も極めて肌理細かく、上等な絹よりも滑らかであるのは間違ひない。寺子屋の生徒の半分が彼女で精通する、などと陰で揶揄されるのも頷ける、絶世の美体だった。

ほっそりとした首筋は白く、照明によつて印象的な桃色に染まっている。鎖骨は優雅に左右へ広がり、やがてなだらかな肩の輪郭と行き会ふ。教壇に立つときのきびきびとした印象とは真逆の、柔らかな印象を受ける。

男の目は、その少し下に吸い寄せられている。すなわち乳房に。円錐形のように前方に突き出しながらつんと上向き、これでもかと自己主張している。本人の奥ゆかしい態度と

裏腹に、だ。

たわわさたるや、普段の衣装からでも分かるほどだ。堂々たるGカップだった。呼吸のたび小さく揺れるほど柔らかな一方で、形崩れしていないというのも素晴らしい。女性として一種理想とも言える、魅惑的なバストラインだ。初恋の人は寺子屋の先生という少年を増やす、罪作りの胸である。

通常、巨乳の女性にはぼっちゃりしている傾向にある。乳房は実質、脂肪の塊だからだ。だが慧音の腹回りは、ほっそりすっきりしていた。適度に肉を蓄え、誘うようなくびれを描く。縦に走る臍が、朝一番の雪景色に残した足跡のような、誇らしい印象を与えてくる。男の視線はさらに下がついていく。骨盤は豊かに左右に広がって、女性を代表するような下半身を形作っている。子を孕み育むのに最適だと、一目みて分かるほどだ。

几帳面さゆえ、下の草叢はよく整えられている。しかしそこそこ濃くもあった。半分は獣の血が流れているがゆえのことだった。

相応の長さを生きてきた彼女は、セックスも一応、経験している。とはいえ、乱交会の参加者達のように、ずっこんぱっこん好き放題交わったりはしていない。ゆえに、秘唇は外見年齢に不釣り合いなほどに、秘めやかに口を閉ざしていた。大陰唇は綺麗な一本線を描いており、貞淑さを印象づける。

尻肉は丸く柔らかく、程よく脂肪を乗せつつむちつとしている。シミ一つない、満月のように美しい魅惑のヒップだった。普段、フレアスカートの内側に隠されているが、いざ露わになると暴力的なほどの魅力がある。

そんな臀部とハーモニーを奏でるのが、脚だ。滑らかですべやかで、頬ずりしたくなるほどだ。教師は基本的に立ち仕事なので、大腿筋をよく使う。その上から肉をほんのりと纏ったレッグラインは実に健やかで、いつまでも見ていられる自然の美を備えていた。

「いやあ、先生、本当にお綺麗ですな。いつもの露出の低い服の下に、こんな素晴らしいカラダが隠れていたなんてなあ……」

声色には、本心からの感動が現れている。賞賛されているようだが、ありがたく感じている場合ではなかった。

——あわわわわ。

彼の言葉で、慧音は己が裸体を晒しているということを今さら意識していた。好きでもないでもない異性にだ。とつさに手で隠した。

「おや、隠さないでくださいよ。この場では、そういうのは御法度ですよ。ボディを隠すのは、私はパートナーを探す気がありませんと言っているようなものですからね」

「そ、そんなことを言われても……」

口ごもる。恥ずかしいものは恥ずかしいのだ。

一方、彼の言うことにも一理あると感じてしまった。乱交会は究極、セックスするための場なのだ。まぐわうために来ておいて、体を隠すというのは、確かにナンセンスに思える。結局、躊躇いに全身を震わせながらも、手を下ろした。

「いやあ、最高の体だ……」

男はまじまじと身体中を眺めてくる。顔見知りに、裸体を隅々まで見つめられている。顔から火が出そうとは、まさにこのことだ。

しかし同時に、腹の奥からときめきに似た衝動がこみ上げるのを感じてしまった。奇妙でありえないことだと自分でも思うが、見られることで感じていた。

「ところで先生、先生はもしかして、乱交会は初めてでは？ 私は毎回参加していますが、先生をお見かけした覚えがありません。先生ほどの美人なら、私に限らず見逃すわけはないので、もしかしたらと思ひまして」

「はあ、ま、まあ、確かに初めてですが……」

「そうでしょうね。初めてだと勝手が分からないでしょう？ よろしければ、お付き合いしますよ」

人の良い笑みを浮かべてこそいるが、男の目には性欲が浮かんている。こちらの肉体を

見て、性的興奮を覚えているのだ。股座でおっ勃つソレからしても、間違いない。

お付き合いというのもお為ごかしであり、要するに性行為を狙っているのだろう。ハイどうぞと頷くのは憚られた。顔見知りの男とコトに至るなんて、後日気まずいことになるのが目に見えていた。

とはいえ、断つてもどうにもならない。会が終わるまで、ぼうつと突っ立っているしかなくなるだろう。なにより、燃えるような体の熱が、彼を選べと強烈に訴えかけていた。結局、拒みたい性への渴望に突き動かされた。

「それじゃあ、お願いできますか」

「おほッ、本当に受けていただけるとは。いやあ、今日は最高の夜になりそうだ。さあさ、先生、どうぞこちらへ」

頷くと、彼は小躍りせんばかりに喜ぶ。自分を安売りしてしまっただろうか。恋愛市場における己の価値というのを、彼女はいまいち把握していなかった。

チャンス逃がすものかと言わんばかりに、男は白い手を引き、ホールの中央へ向かう。なるべく壁際にいないと視線を集めてしまうのではないか、裸を見られてしまうのではと危惧したが、そうでもなかった。皆、目の前の性行為に夢中で、周りを気にしていない。そもそもこの場では皆が裸なのだ。誰かが素っ裸でいたところで、何も不思議ではない。

ソファに並んで座る。男は係の者を呼びつけ、酒を運んで来させる。こいつがまた絶品でしてな、などと語る様は、明らかに場慣れしていた。

任せておけば心配はいらないと、少し安堵する。セックスパーティーに場慣れする男というのは、本来、どう考えても心配すべき部類だが。

器はグラスで、注がれているのはウイスキーだ。どちらも人里では入手の難しい代物だ。妖怪の賢者主導の催事だからこそできる芸当だろう。酒目当てで来ている者も少なくないのだろうな、と思うと、この会もちよつとした宴会に思えてくる。すぐ後ろに置いてあるベッドの上で男女が組んずほぐれつしているわけだが、感覚が麻痺しつつあった。

「はあ……」

話しながら一杯二杯口にしたところで、体が興奮とは別の熱を帯び始める。もともと、酒に強いほうでもない。意識がぼんやりと、心地よく輪郭をぼやけさせる。強ばっていた神経もほぐれていく。

「っ、あ」

体に、男の手が触れる。よく日焼けて、ごつごつとしたいる。

付き合ってもいない男性に、触られている。むずがるように体をよじり、一瞬身を硬くする。それでも、拒みはしなかった。貞操観念をアルコールがほだしていた。欲望と操の

間で揺れ動く天秤は、前者の側に傾きつつある。

手が、肩や腹、腕、腿を撫で回す。刺激に慣れさせるように。柔らかな手つきは、性感とはいわないにしても快い。玉葱の皮を剥くように、抵抗感を一枚一枚剥いでいく。

十分受け入れたところを見計らい、彼はよりセンシティブなところへ手を伸ばしていく。すなわち、万人の目を惹き誰もが懂れる、豊満なる乳房へ。

「んっ」

柔らかな乳房は、男の手を受け入れてむにゆりと形を変える。同時に元の形に戻ろうと反発し、確かな弾力で押し返しもする。魅惑の感触は、確実に男を惑わした。おお、と、感嘆の声を漏らしていた。

対する慧音は、小さく体を震わせる。いくらか身を強ばらせつつも、拒みはしなかった。反応を確認したことで、指先でつくばかりだった男の手つきは、次第に大胆なものになっていく。ゆつくりと揉みしだき、豊山に指を沈ませていく。

「ふ、は」

熱い吐息をこぼしながら、されるがままに身を委ねる。たまに漏れる声が、何を感じているか端的に示していた。

「はあ……!!」

男の指が、前方に突き出すような巨乳の先へ伸びる。淡い色の乳頭を、親指と人差指で摘まむ。麗しい体が、びく、と跳ねる。息を呑むような声が続く。明確に、性感を覚えたことを示す反応だった。

「ん、は、あぁッ、く、んう」

くりッ、くりつと、乳首をこね回される。むずがるように身をよじったが、嫌がったことではなかった。実際、二人の身体は、ソファに座った当初よりずっと近づいている。親密な恋人の距離といってもいいほどだった。

右手が乳房を弄ぶ一方で、左手はゆっくりと下っていく。ほんのりとくびれたウエストラインを、上下にさすってくる。官能とはまた異なるくすぐったさに、思わず身をよじる。

「ッ」

手はなおも止まらず、さらに下へと向かう。掌が太腿にまで至ったところで、反射的に脚を閉じた。この流れでどこを触ろうとしているか分からぬほど、慧音も無知ではない。

膝をこじ開けるように、わずかな隙間に潜り込もうとしてくる。とんでもないことだ。確かに彼とは親しく会話することもあるが、あくまで近所づきあい、世間話に過ぎない。間違っても男女の関係ではないのに、許してしまつて良いのだろうか。あまりにふしだらなことはないか？

——いや、乱交会において貞操云々など、誰も気にしないのだ。気にするような奴は、そもそも会に参加してはいるまい。郷に入り手は郷に従えという。なにより、うずうずと疼く腹の奥が、拒まないでと己に對して主張していた。

固く閉ざされていた脚が、ゆっくり開かれていく。さながら天岩戸だ。隠れているのは天照ではなく、はしたない唇だが。

ふさふさと茂る草叢をかき分けて、男の指は密やかな裂け目に伸ばされる。心臓が強く鼓動している。一部は、本当に許してしまつていいのかという葛藤からくるもの。残りは、快樂への渴望からくるものだった。

迷っている間にも、カサついた指先は近づいてくる。そしてとうとう、そこに触れた。

「アッ……！」

漏れたのは、熱い溜息だった。びくんと、体が震える。

恥部を他人に触れられるなど、一体いつぶりのことだろう。覚えたのは、嫌悪ではない。純粹な、性の悦びだ。

快感は、砂漠に水滴を垂らしたときのように、じんわりと染み入っていく。これこそが望んでいたもののだと、強く自覚する。だが一方で、足りないとも感じていた。渴きをすっかり癒やすには、もっとたくさんの性感が必要だ。

強ばっていた体から、力が抜ける。慧音は知らなかったが、それはこうした場において、あなたを受け入れますよという何よりのサインだった。

「は、あ、んう」

男が指を操り始める。ゆつくりと円を描くような動きだ。一本筋を描いた秘唇を、まず解そうとしているのだ。下腹の筋肉が、ぴくッ、ぴくッと反応している。合わせて、はつ、はつと、熱くも甘い息が漏れている。

大丈夫だろうか、アルコールの回る頭でほんやり考える。恋人でもない男に、大切なところを触らせて大丈夫だろうか——という意味ではない。感じすぎていないだろうか、今の自分は、いやらしすぎないだろうか、という意味だ。

性に疎い慧音でも、今しているのがまだまだ序の口レベルだということくらいは分かる。なのにこんなふうに、体を震わせて、吐息を零して。はしたない女と思われてはいないか。勝手が分からないということは、何より不安にさせる。

不安を宥めるように、男は指を動かし続ける。尺取虫のように、指の腹で擦ってくる。甘い感覚が、腹の奥からぞくぞくと上ってくる。はあ、はあと、意識をじわじわと蕩かしながら、身を震わせる。もう片手でたわわな乳房をゆつくり揉まれると、甘い官能がこみあげてくる。

次第に、下腹のあたりから、くちり、くちりと音がし始める。すぐ側で話さないと声も聞こえないほど賑やかであるというのに、妙にはつきり聞こえた。体内から鳴っているのだから、当然といえば当然だった。

秘唇が、濡れつつある。奥からこぼれた蜜が、指によつてこねられたことで音を立てていたのだ。触れられて音をたてるくらい、滲む愛液はねっとりとしていた。

「あ、やだ、あ」

小娘がむずかるように、身をよじる。消えてしまいたくなる。ちょっと触られたくらいで濡らしてしまうなんて、あまりにはしたくないじゃないか。

けれども、男は指を止めようとしなかった。むしろ、慧音を安心させるように、もっと聞かせてほしいというように、動かしつつける。

耳元に口を近づけてくる。何か囁こうとしているのかと思つて、そちらへ首を傾ける。が、違った。唇の隙間から舌が伸び、耳を舐め回しはじめた。

「あつ、ふ、何、あ、ん」

にち、にちつと、唾液の音が響く。普通なら、嫌悪感を覚えるのだろう。慧音も、正直驚いてはいた。しかし、嫌だとは思っていないかった。それどころか、妖しい快感を覚えて、戸惑っていた。

惑っている内に、男は愛撫を続けていく。快楽に潤み始めた秘唇の端に、小さな膨らみがある。女性最大の性感帯の一つ、陰挺を、指の腹で、とん、と押しした。

「アァッ！」

大して強く触れたわけではない。母親がややこを寝かしつけるために、とん、とんと胸を叩いてやるのよりも曖昧な指使いだ。それでも身体は、ビクッ、と跳ねた。

全身に電流が走ったようだった。神経の集中したところに触れられたゆえだった。五感
は電気信号からなるわけで、ある意味では当然の反応といえた。

「あつ、あぁッ、く、はッ、はひッ、あ、はぁあつ」

陰唇を撫でくりまわしながら、ときおりとんつ、とんつとクリトリスをつついてくる。
甘く淡い官能と、ソリッドな性感。二種の快楽を使い分けられて、どんどんと羞恥を、
体面を剥ぎ取られていく。その奥に押し隠していた性欲を、剥き出しにされていく。

「はぁ、はぁ、あ、はぁつ……」

なだらかな肩が、ゆっくりと上下している。

指使いは決して乱暴なものではない。むしろ紳士的といってもいいくらいだ。それでも、
性の快楽自体久しぶりの体には、効いた。柔らかな肌は、汗によってしっとりしている。

秘裂は既に、隠しようもないほどに濡れている。明らかに汁気を帯びた陰唇が、ピンク

の照明を浴びてきらりと輝いた。

男の指に、ぐっ、と力が込められる。中に、忍び込もうとしているのだ。

「待っ——」

待って、という言葉は、最後まで紡がれなかった。彼女自身が、言うのを躊躇ったのだ。快楽への欲求が、発言を遮ったのだ。

まごついている間に、汁気を帯びた裂け目の中へ、指がぬるりと入り込む。ずっと長く、他者の侵入を許してこなかった狭穴を押し広げ、臍肉を刺激する。

「ああああ……ッ！」

引き絞ったような声が漏れ出す。満たされる官能、そして自らが許したことのとんでもなさへの、驚きが現れていた。

が、そんなことがどうでも良くなるくらい、与えられた快感は、よかった。じんわりと深く、甘く染み入りながら、本能的な悦びで満たしていく。許してはならぬことを許してしまったのではないかという疑問すら、些細に思えてくる。

「あっ、は」

知らず知らずのうちに、男の腕を掴んでいた。やめてほしいと思つてのことではない。続きをねだつたことだった。

「あッ、はあ、ンッ、くふう……っ」

指を蠢かし、ゆつくりと抜き差ししてくる。曖昧な気持ちで許すべきでない、最も大切なところを、探られている。強烈な羞恥に、顔が赤く染まる。

けれども、やめてほしいと思いはしなかった。むしろ、指が褻をかき分けるように奥へ進むほど、声の甘さは強まっていくようだった。

男はしばらくそうして、慧音の肉道を探っていた。快感に不慣れな隘路を、慣らそうとしているようでもあった。

「ふうっ、は、あぁッ、あぁん」

そういう目論見があつたなら、かなり上手くいつているといえるだろう。秘部は次第にほぐれ、快感を素直に受け入れ始めた。

こわばりが緩むにつれ、指の動きが、単なる探索から、次第に愛撫らしい趣を得ていく。指の腹で、膣内でも特定の箇所をゆつくりと擦り上げてくる。

敏感な粘膜においても、特にそこを擦られると、腰がふわりと浮いたように感じられる。とろっ、とろっ、と、蜜が溢れてとまらない。

「あッ、あ、いやだ、まって、まって」

これほど説得力のない「いやだ」と「まって」もなかった。声は甘く、脚を閉じる気配

もない。むしろ腰を軽くくねらせ、誘ってすらいるようだった。

男もそう感じたらしい。次第に、指の動きを激しくしていく。

「ふっ！ あっ、はあ、ああッ、あ！ んッ、は、ああー……ッ！」

快感が、いつそう明確なものになっていく。慧音はもはや押し殺すこともなく、嬌声をあげていた。

体の中で指が踊るたび、己の奥で頑固に積もり燻っていたものが、解きほぐされていくようだった。性感とともに、日頃の疲れを按摩で癒やすような本能的な快感が身を包む。

くちよっ、くちよっと、膣口から音が鳴り始める。十分なほどに濡れそぼった膣穴が、指技によって水音をあげはじめたのだ。ねっとりした音に、自分がどれほど感じているか、今さらながらに思い知らされる。なのに、咎めようとしてこない。むしろ、肯定するかのうように、さらに続けてくる。

今さらながら、ここではいくらでも乱れてもよいのだと思ひ知らされる。もちろん知識としては分かったつもりでいたが、実感で理解するのはまた別なのだ。

「はッ、ああッ、あんウ、く、は、ああああ……ッ！」

ずっと内に隠してきたものに対し、太鼓判を押された気分だ。もはや何に縛られることもなく、己を曝け出し始める。官能的な声を積極的に漏らし、男にすがりつくように身を

委ねていく。

里でも名の知れた美人教師にしなだれかかれるのは、男の欲を強烈に刺激したらしい。空いた手で、手首をそっと掴んでくる。ゆっくりと、己の股座へと導いていく。

「あっ……」

何をさせようというのか分からないほど、慧音も無知ではない。股間で、逞しいほどに膨れ上がった、男性の象徴、ペニス。それに触れさせようというのだ。だからこそ、手は躊躇うように、逃れようとした。

酒と快楽にふやけた頭でも、己が今、行きずりの男と性行為していると意識させられる。行く果ては、快楽を貪るための性交だ。そんなのはダメではないかと、麻痺しかけていた倫理観が今さらながら警告する。当初思っていたのと、だいたい同じことだ。違いがあるとしたら、今は何となく惹かれてもいたが。

「あ、あの。愛撫は、その、いいけれど。挿入するのは……」

口ごもりながらも、己の意思を伝えようとする。何が挿入だ、もうちょっと気の利いた言い回しがあるだろうと、己自身を叱咤する。

男は慧音を安心づけるように、そっと体を撫でてくる。

「ええもちろん、挿入はしませんよ。私も先生も、リストバンドが緑でしょう？」

言って、男は己の手首を見せつける。受付で配られるもので、赤黄緑の三種ある。色に応じて、許すことの範囲が変わる。緑同士で認められるのは、ペッティングまでだ。

「でもそれって、口約束みたいなものなんじゃ？」

「まさか。係のものが目を光らせていますよ。リストバンドの色を無視して強引にコトに及べば、すぐに追い出されます。で、いわゆる出禁にされますね。妖怪の賢者や稗田様は、よっぽど不祥事を防ぎたいんでしょう。……まあ、皆分かっています、ここに参加しているということですよ。獣じみた乱痴気騒ぎなように、理性的に遊んでいるんですよ」

「……そういう、ことなら」

消極的に、受け入れる。消極的なのは、振りでしかなかったが。

一度止めておいて何だが、慧音は、さらなる行為に興味津々だ。触らされそうになったことで、ソレのことを強烈に意識していた。

おそろしいほど遅しく反り返り、膨れ上がったモノ。先端は赤黒く、幹は薄黒く、どう見てもグロテスクでしかない。だというのに、奇妙に惹かれている。ふしだらなことだと分かっているのに、ちらつ、ちらつと、視線を向けてしまう。

「さあ、先生」

促され、ゆっくりと指を伸ばしていく。はしたないぞと主張する理性をねじ伏せながら。

興味はときに、倫理観を凌駕するものだ。まして今のように、熱に浮かされた状態では、なおさらだった。指先が、幹に触れる。

「熱っ……」

思わず、呟いた。

彼女は知らないことだが、そのような言葉は、男性にとっては何よりの賛辞の一つだ。里有数の美女から褒められた魔羅は、さらに大きく膨れ上がっていた。

異性の、男性器に触れている。とんでもない事態なのに、やめようとは思わなかった。強烈な磁力で吸い付けられているように、指はびったり、ソレに触れていた。男根が本来持つ女への求心力が、離すことを許さない。むしろ、いつそう大胆な行動を取らせる。

指を、ゆっくりと上下させていく。もちろん、肉幹に絡めたままだ。陰茎を、根元から先端に至るまで、指先で扱っていく。いわゆる、手淫だ。

「ああ……っ」

いったい、なんということをしてしまっているのか。愕然とさせられる。自分からこのようなことを初めて、引かれたりしないだろうか。不安に感じなくてもないが、なおも指は止まらなかった。ゆっくり、ゆっくりと、彼自身を扱き上げていく。

とんでもなく大胆なことをしていると、本人は思っている。一方、手つきは、客観的に

みれば、消極的でどこもないものだった。

当然だった。手淫など、今日初めてするのだから。勝手もなにも分からないのだから、拙いものになるのは当然のことといえた。

「おッ、おッ」

が、男はぶるりと腰を震わせる。職人が丹念に織ったシルクよりも滑らかな手の感触と、初々しい彼女の反応を、大いに楽しんでいるのだ。

漏れ出した低い声に対し、痛かっただろうかと、手を止める。彼は続けてほしいというように身をよじった。促されておそるおそる再開すれば、またぶるりと腰を震わせる。

痛がっているのではなく、感じているのだろう。あちらもまた、快感を覚えているのだ。胸の内が、えもいわれぬ達成感で満ちていく。

自分の行いで相手を感じるといのが、こうも喜ばしいことだとは思っていないかった。ならこういうのはどうか、これはどうかと、下手なりに工夫を凝らしていく。肉幹を手で包み込みながら、先端を指で擦り上げていく。特に反応の強い、鈴口の周りのあたりを、指先で弄んでいく。どれもが、ことごとくツボを突いていた。

「はッ、あ、あぁッ、は！」

不意に、慧音の腰が震える。男が手の動きを再開させたのだ。肉の狭道を、ゆつくりと

ほじってくる。くちつ、くぷつと、秘貝がはしたない音をたてる。ぞくぞくつ、と上ってくる性感に、全身を震わせた。

膣道半ば、臍裏のあたりを、男は指の腹でぞりつ、ぞりつと擦り上げてくる。弄ばれるたび走るソリッドな刺激に、高い声をあげる。授業中には決してあげない、悩ましい声を責め立てられてなお、慧音は手淫をやめようとしなかった。こんなところでやめるのもつての外だと、己の中の何かが主張していた。

「はあッ、はあ、ああッ、あ」

甘い声をあげながら、しゅにッ、しゅにと音をたてて、肉竿全体を擦りたてていく。ただでさえ拙い手つきが、与えられる官能でさらに拙くなっていたが、男はむしろノイズを楽しんでいるようだった。

「あーッ、あッ、あッ、あ、あッ」

そうして奉仕するほどに、男はさらに指の動きを激しくする。脚は大胆なほどに大きく広げられている。隠そうとしていたことなど忘れたかのように、腰を前後にカクつかせる。自分でも知らなかった性感帯を執拗に擦り上げられて、慧音の意識は蕩けんばかりだ。

寝ぼけているときに何をしたか自分で覚えていないように、彼女は今、自分がしていることを、よく分かっている。今まで鎖で縛り付けられていた性欲が、久方ぶりの自由を

謳歌するべく、彼女を突き動かしていた。

「先生」

そうしている内に、男の顔が近づいてくる。いつものえびす顔が鳴りを潜めた、極めて真面目な顔だった。目には、これ以上ない興奮が浮かんでいる。まるで獣だった。

「あ——ん」

目に性欲をありありと浮かべた男が顔を近づけてくる。恐怖を覚えるべき場面だろう。だが慧音は拒みもせず、自ら瞳を閉じた。己も似たような目を浮かべていると、ほんやりとながら悟っていたため。向こうが何をしようとしているか分かっており、彼女自身その行為を望んでいたために、だ。

「んッ、む、んう、ん……」

六十手前の男の、かさかさした唇が、艶やかなリップに重ねられる。むろんそれだけで終わるわけもなく。ぬるりと、舌が入り込んだ。

赤の他人の口腔粘膜が、こちらの口腔粘膜と触れ合う。普通なら、嫌悪してしかるべきところだった。しかし今の彼女は、性の興奮に突き動かされる彼女は、むしろ喉の奥から、恍惚の声を漏らしてみせた。

「くぷう、れろッ、ぢゆる、んッ、くふ、んうう」

口内で舌が蠢く。男は目の前の美女の口腔を味わうように、口壁・歯茎・歯に口蓋と、隅々まで舌先を這わせていく。

キスというものについて、今までずっと、情愛を示すための行為だと捉えていた。恋人同士がお互いに愛を示すために交わすものだ。

その認識は、必ずしも間違っていないはずだ。一方で他の側面もあるのだと、彼女は今知った。接吻とは、お互いに快楽を与え合う、立派な性行為だ。

現に今、体は昂ぶりつつあった。繋がった口から、恍惚が広まっていく。脳に近い部位だからか、酷くはつきりと感じられる。舌と舌が触れあうたび、えもいわれぬ官能が身を包んでいく。もっともっと、繋がっていたくなる。

「んふうッ、れろッ、れる、れろおっ」

長い間欲望を縛り付けてきたために、彼女は実に貪欲だ。されるがままでいられるわけもない。次第に自らも、舌を絡め始める。ぬと、ぬとっと、口内で唾液がやりとりされていく。小さく喉を鳴らしては、他人の体液を嚥下していく。

これも、いつもの慧音にとっては信じられないことだ。口内粘膜の接触、体液の交換。不潔だし、病気に感染する可能性もある。しかし今だけは、こうしかないという選択肢こそあり得なかった。もっと気持ちよくなれる手段が目の前にあるのに、どうして選ばない？

「ンッ、く、ッ、ふ、んっ……ん！」

くぶッ、くぶっと、繋がりがあつた唇の間から、ねとつく音が漏れる。さらに一つ、水音が加わつた。すなわち、肉貝が弄ばれる音だ。

男は熱烈なキスを交わしつつ、秘裂への愛撫を再開させていた。そのようにされては、もう悶えることしかできない。くぐもつた嬌声を漏らして、腰をくね、くねっと震わせる。ふうっ、ふうっと、漏れる鼻息は荒く、明らかな興奮を物語っていた。

慧音も、されてばかりではない。男の股座に伸ばした手を動かしていく。焼けた鉄のように熱いシャフトを、手首のスナップを使って抜き上げていく。やはりぎこちないが、情熱的な手つきだった。蕩けるような性の悦びが、彼女をひどく積極的にさせていた。

「くう、んッ、ぢゆるッ、ぢゅぷ、んう……ぷあ」

目の前の素敵な行為に、いつしかすっかり夢中になっていた。この時間がずっと続けばいいのにとすら、ぼんやりとながら考えたくらいだ。

が、そうはいかなかった。男が口を離れたからだ。繋がっていた唇の間を、唾液の糸が伝っている。ねっとりとしているのが、二人がどれほど興奮しているかを示している。

指も引き抜かれてしまう。異物に吸い付いていた膣肉は、ちゅぽっ、と、はしたない音を立てる。恥ずかしく感じるが、今さらだった。

「んう……」

むずがるような声が漏れる。弄ばれなくなったとたん、腹の奥に強い疼きを感じていた。まだまだ足りないのに、と思うと、眉間に皺が寄る。男は苦笑いを浮かべた。

「まあまあ、先生、そんな顔しないで。思ってたより積極的なので、もっと進んだことをするのはどうかと思ったんですよ」

「進んだこと？」

一体、どんなことなのだろうか。寄った眉根が解れる。乱交会に來た時点では、相互の手淫に接吻だけでも、とんでもないと思っていたのに、今や彼の言葉に期待するほどだ。

「ええ。まあ、すぐに分かりますよ。っと、ほら」

男はソファの上に寝転び、慧音を己の上に寝そべらせる。それも互い違いにだ。相手の眼前に、相手の股間がくる形だった。

「さ、流石にこれは、ちよっと……！」

隠すべき部位が、丸見えになってしまう。慌てて脚を閉じようとするが、先んじて彼が頭を挟み込んでいた。どうにもならず、腰をよじるばかりだ。

男の視線が、はしたないところに思い切り注がれているのが分かる。しかも今、そこは性への期待と快楽によって濡れ、ときおりヒクつきまでしている。

そんなところを見られていると考えるだけで、腰がゾクリと震えてしまう。止めねばと思っているのに、むしろ蜜は溢れ出して止まらない。

「いやあ、素晴らしい眺めだ。……では失礼して」

「ひんッ!」

裏返った声が飛び出す。下半身に、何かが触れたためだ。

指ではない。指はあんなにヌルツと、ヌメツとしていない。今の、蛞蝓が這ったような感覚は——舌だ。

「ちょ、つと、そ、そんなとこ、舐めるなんて」

「ぢゅるッ、れろ、ぢゅッ、れろろっ」

「あ、待つ、あ、はああ!」

行為に関しては、知識としては持ち合わせている。前戯のひとつ、クンニリングスだ。実際されてみると、とんでもなかった。見られるだけでも恥ずかしいのに、舐められる？顔が火を噴くようだった。

抗議の声を無視して、男は舌を這わせていく。ぴちゃッ、ぺちゃつと、独特の音が響く。指よりも曖昧ながらも、ぞくぞくとこみ上げてくるような妖しげな快感に、腰を震わせる。びくっ、びくっ、体を跳ねさせるたびに、たわわな乳房がふるん、と揺れた。

「あ、ああ、そんな——ああっ！」

一際大きな反応を示したのは、ぶっくり膨れた陰核を舌先で突かれたためだ。ヌルヌルと舐め回される官能と、陰核刺激による電流。趣の異なる二種の快楽に狂わされる。

「はあッ、はあ、ああ——ッ」

そしてもう一つ、心を捉えてやまないものがあつた。すなわち、眼前のペニスだ。

間近でみるに、グロテスクだった。からくれないの先端は大きく張り出して、鈴口から透明な汁を滲ませている。黒ずんだ幹の表面を青黒い血管が大蛇のように這い回っている。濃い男性の匂いが、鼻孔から肺に忍び込んでくる。嗅覚が強烈に刺激され、目の前にあるものが何なのか、はつきりと意識させられる。

「ぢゅッ、れろッ、ぢゅるるッ、れろおッ、レロッ」

「くッ、はッ、んう！ くッ、んう、んうう」

男の舌は膣内に入り込み、溢れる蜜をぢゅるぢゅると味わい続けている。恥ずかしくてたまらないというのに、やめてほしいとはまったく思わなかった。むしろ、もつともつととねだるように、腰を押しつけてしまう。

熱烈な口奉仕を受けながらにして、これが完全な行為でないことを慧音は知っていた。頭の中にあるのは、入室時に見た光景だ。互いの股に顔を埋めて、舐め回す男女の姿だ。

彼女は名を知らないが、いわゆるシックスナインだ。互いが互いに快楽を与えあつて、初めて成り立つ性愛の形だ。

思わず、喉を鳴らす。

男のモノを、口腔でしゃぶる？ 排泄器でもある器官を？ 全くとんでもないことだ。だが、そのとんでもないはずのことを、切つて捨てられずにいる。むしろ、してみたいという欲望がむらむらとこみ上げてきてすらいる。

欲望と理性の天秤は、欲望の側に傾いた。なんといつても、下半身からこみ上げてくるエクスタシーが、強烈に後押ししていたがゆえに。

恐る恐る、唇を近づけていく。いいのか、いいのか、お前がしてるのはダメなことだぞと、相変わらず理性が喚いているが、もう止まらない。もはや常識などでは、燃え上がる体を鎮めることはできないのだ。

「んうっ……」

先端に口づける。むちゅつ、と、印象深い音が鳴った。ホール内のBGMに一瞬でかき消されるような、ごくごく小さな音でしかないが、聴覚ははっきり捉えた。上白沢慧音の、生徒を指導すべき艶めく唇が、男のシンボルに触れた音だった。

「くうん……ッ」

腹を空かした犬のような、切なげな声が漏れた。ほんの少し口づけたただけだというのに、口内いっぱい男の匂いが広がったためだ。

有り体に言ってしまうえば、他人のシモの匂いだ。快いわけもない。だというのに、酷くクセのある臭気に、強烈に惹かれてしまう。もっと味わいたいという欲求が、心を満たす。「んっ、ちゅ、んちゅ、んっ、むちゅ、ンッ」

理性の鎖は欲望の獣によってあっさり引きちぎられる。ちゅっ、ちゅっ、むちゅっと、何度も唇の雨を降らせていく。亀頭に、雁首に、竿部に。リップの痕が残りそうなほどの、熱烈なキツスだ。

そのたびに強まる雄の臭いに、味に、瞳が蕩ける。だが、彼女の凝り固まった性欲は、なおも満足しなかった。だんだん、より深く、しつかり味わいたくなる。そのためには、キスでは用が足りない。であれば、他の男女がしていたことを、真似るしかないだろう。

「えあ」

大きく口を開く。下品なほどに。

生徒達がそんな風に給食を摂っていたら、行儀が悪いからやめなさいと指導するだろう。これでは、人のことなど言えないではないか。しかも、今から啞えようとしているのは、人気献立のハンバーグでも、コッペパンでもない。行きずりの男の、男根なのだ。なんて、

とんでもないことをしようとしているのか。

どくつ、どくつと、心臓が高鳴っている。はあ、と、喉の奥が引きつった。が、今さら止められやしない。そのまま、えいやとソレを口に迎える。ぷっくりしたリップで、肉竿を包み込んだ。

「んふうう——ッ」

くぐもった声があがる。口内に満ちたのは、キスしていたときとは比べものにならないほど濃厚な、男性臭だった。むせ返りそうな雄臭を前に、まるで恋に落ちたかのように、胸が、腹の奥が、きゅうん、と疼いた。

そのように惹かれてしまったのは、もうだめだった。恥ずかしいだの、はしたないだの、まったくの些事だ。音を立てて、陰茎をしゃぶりはじめる。

「ぢゆるッ、くぷッ、ぐぷッ、んふう、ッ、ンむつ、くぷう」

くぷッ、かぼつと、口端から音が響く。口腔を、肉竿を抜くための道具にしている音だ。唇と竿の隙間から空気が抜けているのだ。そうして味わうほどに、肉竿特有の匂いが一層強まっていくように感じられる。脳味噌にペニスが充満しているようだった。

慧音は早くも、目の前のモノに夢中だ。ソレが本来、排泄器官であることなど、もはやどうだってよかった。もっと味わいたいという欲望が抑えられない。抑えるつもりもない。

「んむう……ぢゆるッ、くぶ、れるっ、んむッ、れるおッ、んむう」

れる、れると、口内で雄のシンボル全体を舐め回しはじめる。唾液の音をぢゆるぢゆるとたてながら。

「おおッ、おお、おお」

そうして舐め回すに、鈴口から雁首、裏筋のあたりが一番匂いも味も濃いことに気づく。そのあたりに、重点的に舌を這わせていく。奇しくもそこは、神経の集中した性感帯でもある。男は呻きながら、腰を震わせた。

手淫が初体験であつたのと同様、フェラチオをするのも初めてだ。にしてはありえないほど、情熱的な口使いだった。性への渴望は、技術の拙さをカバーしてあまりあつた。

「んうっ!？」

しばし夢中で男根をしゃぶり続けていたが、不意に口淫を中断する。下半身から上ってきた、痺れるような快感ゆえに。

男がクンニリングスを再開していた。ぢゆるッ、ぢゆるりッと音をたてながら、陰唇にしゃぶりついては陰核を刺激してくる。

「ン、ンくうふ、んううッ」

そんな風にされたら、目の前の竿に集中できない。しかし、やめてほしいとは思わない。

むしろ、もつとしてほしいというように、ぐりぐりと腰を押しつける。

二種類の、ねっとりした水音が響く。互いの股間からあがつている。やんごとなき部位を舐め回されながら、慧音はなおもフェラチオをし続けていた。シックスナインにおける作法なのだろうと、入室時にみた光景から学んでいた。

口淫は先ほどに比べると精彩を欠き、ときおり喉の奥から甘い声がノイズとして漏れ出している。快楽を与えるだけでなく、与えられてもいるのだから、当たり前のことだった。幸いにして、それは口腔奉仕において、アクセントのような働きをしているようだった。喉を鳴らし、体を震わせるたびに、男もびくりと腰を震わせていた。

「ぢゆるうッ、んふ、くう、ンッ、む、んう、ンッ」

「ぢゆるッ、れろッ、レロロ、ぢゆるうッ、れろれろれろ」

何かされるたび、もつとしてほしいというように、眼前の性器に尽くす。互いに互いを高め合っていく。もはや慧音も、すっかり乱交会の参加者になっていた。当初は獣のようだと断じていた、淫猥なる空間の住人になっていた。

「くううッ、ふ、んうッ、ん！ く、んう、んううう……ッ」

嬌声は次第に切なく、焦燥を帯びたものになる。腹の奥から、こみ上げるものがある。単純な快楽ではない。より大きくて、激しいうねりだ。その正体を、慧音は知っている。

絶頂が近いのだ。

いくら身持ちが堅いとは言え、自慰はするし、オーガズムに至ることもある。だから、その兆候たる感覚も、覚えたことはある。普段と違うのは、今回ののは、あまりに甚だしいということだった。

予兆でこれなら、達したときには一体どうなってしまうのか？

覚えたのは僅かな不安、そして圧倒的な期待だった。

同時に慧音は、口内で、肉棒が膨らんでいるのを感じていた。火傷しそうなほどの熱が、いつそう増している。何を意味する生理現象かは、状況から推測できる。射精が近いのだ。射精。男が性的絶頂を迎え、精液を生殖器から放出する現象。思い浮かべた瞬間、恋人のことを想うときのような胸のときめきが訪れた。早く出してほしい——そんな願いすら込めながら、ちゆるちゆると熱烈な口淫を繰り返す。そもそも限界に近かったペニスには、ちようどよいとどめとなった。

「おッ、オ、おお、オオオオ……ッ！」

「んぐ……ッ」

男が呻く。肉棒が根元から先端にかけて膨れ上がり、力強く弾けた。

どくんッ、どくんッと、肉棒全体が脈動する。睾丸の中に溜め込んでいた種汁を、勢い

よく吐き出していく。無数の精虫からなる粘液が、鈴口から口内へどくどく放たれていく。
「シンンッ——」

思わず、喉を鳴らした。ソレは痺れるようなえぐみを持ち、顔をしかめたくなる海鮮系の臭気を纏っていた。そもそも他人の体液なわけで、美味なわけではない。端的に言って、まずい。だというのに、スペルマの味は、匂いは、彼女を虜にしていた。

これこそを求めていたのだと、確信する。他人の体から出たものだから、まったくどうでもよいことだった。喉を鳴らし、嚥下していく。ねとねとした濁液が、食道に絡みつきの離れようとしないうちに、好ましいと思えた。

「んうううッ……！」

白い喉が引きつると、一際高く切ない声があがった。がくつがくつと、全身が震える。ふるんッ、ふるんつと、たわむる乳房が揺れている。誰が見ても分かる。絶頂したのだ。アクメの快楽が腹の奥からこみ上げて、身体を駆け巡る。今までのような、じんわりと広がって甘く蕩かすものではない。理性を押し流し本能を溺れさせる、激しい波だ。

さながら、彼女は、荒れ狂う海に放り込まれた小舟のようだった。時化の海と違うのは、海が冷たく無慈悲であるのに対して、快楽がどこまでも優しいということだった。

「くッ、んうッ、んうううッ」

慧音にできるのは、目を白黒させながら、翻弄されることだけだった。そして同時に、ひどく幸福な気持ちにもさせられる。ずいぶん長く待ち望んでいたものをやっと得られた——そんな気持ちだった。

官能が全身を満たしていく。既に、乱交会への抵抗心など欠片もなかった。あるのは、もつともつと気持ちよくなりたいという、ずっと押しとどめていた欲求だけだ。

「くう、ふッ、は、んは、はあ、あつ、はあ」

やがて、溜め込んできたものを全て吐き出すような絶頂が終わる。優しくも激しい快樂の荒波が惹いていき、心地よい余韻が訪れる。春の陽気の中、軒先でほんやりとうたた寝をしているときのような、そういう根源的な気持ちのよさだった。

「はあ……どうでしたか？ 先生。満足していただけましたかね？」

いつの間にか立ち上がっていた八百屋の男が、えびす顔で訪ねている。その顔は汗気を帯び、てらてらと輝いていた。何で濡れているのかなど、考えるまでもない。申し訳なさずと恥ずかしさで、顔が赤く染まった。

「いやその——まあ、その、すごくよかった、です、はい」

いったんアクメを迎えたことで、頭が冷静になってくる。相手が顔見知りであるがゆえ、よけいに気恥ずかしく、気まづく感じられた。どもりながらも返すと、男は大きく頷いた。

「それは何より、私も先生のような人といい時間を過ごせて嬉しいですよ。……でも実は先生、まだ満足してないんじゃないですか？」

「え？ いや、それは、そんな」

口ごもる。答えるのが憚られたわけではなく、単純に判断しかねたからだ。

なんととっても、先の絶頂は素晴らしかった。凝り固まっていた欲を、すっかりと解きほぐしてくれたようだった。

だが、よくよく己を顧みてみれば、なんとなくまだ足りないような感じもしてくる。欲がムラムラとこみ上げて、腹の奥が疼いてくる。ぜんぜん足りないぞと、訴えかけてくる。「よろしければ、まだ時間もありますし、どうですか？ もう一回」

「あッ、は、あ、そんな……んッ！」

男の手が、両足の間に入り込む。達したばかりの陰唇に、くちりと触れる。それだけで、もうたまらなくなってしまった。

「そうですね、そ、それじゃあ、もう一度だけ……アッ！ ん、ああ！」

答えるなり、彼は体内に入り込んでくる。慧音も慧音で、己の唾液にまみれた陰茎に、指を伸ばしていく。淫らなる夜は、まだまだ続きそうだった。